あまつひと

ひろね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あまつひと

【Ｎコード】
Ｎ６８８１Ｘ

【作者名】
ひろね

【あらすじ】
人に脅威を与える“魔”を滅ぼすことができる唯一の血脈”天つ人”。
その血を半分引くもの同士が結婚した。
小さいときに仲がよかった２人だけれど、再会してからの関係はぎこちなくて…
※多少微妙にＲ指定が入りそうな部分があります。
※自サイトにも掲載しています。

第1話　天つ人の婚礼ーはじまり（前書き）

少々微妙な表現あります。

第1話　天つ人の婚礼 ―はじまり

それははるか昔のことだった。
まだ世界には秩序がなく混沌とした状態で、地上で、天空で、天つ神と大いなる魔と呼ばれるものたちが戦っていた。そのため、地上に生きる人々はその戦いに怯える日々を送っていた。
何の力ももたない人には、天つ神と魔の戦いはそれだけ苛烈だった。
そして長い長い時を経て、天つ神が優勢になる。大いなる魔は天つ神に敗れ、人々はやっと平和に暮らせると安堵した。
けれど、見守ってくれるだろう天つ神も終わりを告げていた。
天つ神は残りわずかな力を使って、人に自分の力を分け与えた。そしてそのための道具も。
いまだ残る、魔に対抗するために。
大いなる魔には劣るとはいえ、残存する魔は人にとっては脅威なもの。人々は彼らを頼りにするしかなかった。
魔に対抗できる人たちを、彼らを“天つ人”と呼んだ。

そして時は流れる。
天つ神が残した天つ人も人との交わりによりその血は薄れていく。当然その力も薄れ、今では魔を完全に絶つことができなくなっていた。
はるか昔、魔を絶つために作られた神剣の力を完全に引き出せる者もいつの間にかいなくなった。
天つ人はそれを補う方法として、神剣で弱らせた後、封じるという手を考えた。今では神剣で魔を弱らせ、封魔石でその魔を封じる――神剣使いと封魔士の二人一組で魔から人を守るという形になる。
そして、これ以上“天つ人”の力が弱まらぬよう、天つ人同士で結ばれる――天つ人と人との婚姻は祝福されないものになっていた。

＊＊＊

村の中で一ヶ所だけ明るい場所があった。そこから喧騒が聞こえる。見れば皆、床に座って盃を交しては笑っていた。
彼らの目の前には数種類の料理――彼らにとってはご馳走になる――が所狭しと並べられ、隙間には陶製の瓶が置かれていた。中身は酒なのだろう。ほとんどの者が頬を赤く染め、中にはろれつが回らないものもいた。それでもまだ酒に手を出そうとする。
めでたい席ということで羽目を外しているのだろう。それを見ても咎める者はいなかった。
めでたい席――村で数少ない若い“天つ人”の婚礼なのだから。
けれど、賑やかな祝宴の中、上座に主役二人の姿はなかった。

喧騒から少し離れた場所に主役の二人はいた。
暗がりの中、床に敷いた厚手の敷布の上で睦合っている、主役の二人――シュクルとミアディという、まだ若い“天つ人”。

「ミア…ミア…」
「んっ、あ、あっ…シュ……」

涙を浮かべながらも名を呼び返そうとする。その表情は快楽よりも苦痛に歪んでいた。初めてなのだから仕方ないだろう。
シュクルのほうも気遣わなくてはと思うものの、そこまで余裕がないらしい。己が欲望のほうが勝る。ひたすら彼女の名を呼びながら、欲望のまま動く。そのたびにミアディの目から涙があふれた。
これも“天つ人”の婚礼の儀式の中の1つで、天つ人同士が結ば

れたことを示すものだった。
しかし、いくら天つ人とはいえ、このようなことことまで婚儀に組み込まれるのには抵抗がある。そのため、形として席をはずす程度にとどまっていたが、この婚礼に関しては違っていた。

この時代まで来ると、天つ人と普通の人との婚姻は祝福されない。人々が彼らの血が、力がこれ以上薄れるのを恐れたために。そのため、天つ人は天つ人同士で結ばれるのが当然になっていた。
だが、二人は天つ人と人の間に生まれた混血（この言い方も今さらなのだが）だった。
特にミアディのほうは村にずっといたシュクルと違い、小さい時に別の村に移り、つい最近戻ってきたばかり。
ミアディはまだ十五歳。けれど別の村にいた間に異性との関係がはっきりしない、という村の人の声により、天つ人の婚儀に則った形になった。
要するに、村の人たちはミアディを疑っていて、そのために、ミアディはこの婚儀で己が純潔を示さなければならなかった。
二人はこうして初めての夜を迎えていた。

宴の騒ぎがとぎれとぎれにミアディの耳に届く。
さすがに宴から出て覗き見るという無粋なものはいないだろう。それでも声が聞こえるたびに恥ずかしさが増す気がした。今は、何ひとつまとわず全てを晒している状態で心もとない。
それでもなんとかことが終わり、疲れと上から見ているシュクルの視線に、恥ずかしさ感じて目を閉じる。ミアディの心の中はいろいろな思いが渦巻いていた。
すでに両親が他界した今、ミアディに家族と呼べる存在はいない。だから結婚という形でも、新たな家族ができるのはうれしかった。
でもこの結婚も、天つ人という存在だからできたことだ。本来な

ら独りになったミアディを受け入れてくれるようなところはない。
彼女を覗き込んでいるシュクルも、本当にこの結婚に喜んでいるのかさえ、ミアディには分からなかった。
でも怖くて聞く気にはなれなかった。
何も持たないミアディにできるのは、おとなしく言うことを聞いてついていくことだけだ。

「ミア？」

心配そうなシュクルの声が聞こえる。

「……なんでも、な…です」

自分と同じ色の瞳――天つ人はすべて血が薄くても金色と呼べる瞳を持って生まれる――に見つめれられて、ミアディはなんとかそれだけ返した。
同時に、なんとか体を起こそうとする。この宴の主役が長い間席をはずしているのも問題だと思ったから。
それを察したのか、シュクルがミアディの動きを助けて起こした。背中に腕を回されて起き上がると、すぐそばにシュクルの顔があった。
完全に大人といえないが、それでも17歳とは思えないような大人の表情をしている。それに神剣を扱うため、その体には無駄な肉がほとんどない。
天つ人でなければ、誰でも選び放題な整った顔。
言い換えれば、天つ人だから、そしてミアディも天つ人だったから側にいられる人。

（もし、天つ人じゃ、なかった…ら？）

自分など選ばない――という自虐的な問いかけを飲み込んだ。

「あのっ、それよりも早く戻りましょう。皆さんをお待たせするのも申し訳ないですし…」

これは天つ人の婚礼の儀のうちの1つでしかない。甘い余韻に浸る余裕などなかった。

それに互いに気持ちが通じ合っているわけではないという引け目もある。

体に力が入らないが、それでもなんとか着ていた服で体を隠しながら立ち上がろうとした。

シュクルもその言葉の意味を解したのか、ミアディに服をかけて、そのまま少し待つように手でミアディの動きを制した。

「シュクル…さん？」

「……ちょっと待ってろ」

何をするのか分からず問いかけると、少し不機嫌な口調で返ってくる。

とはいえ、どうしていいのか分からないので、言うとおりにすると、シュクルはそのまま上着を羽織り入り口に向かう。

扉に向かうシュクルの背中を見ながら、先ほどまですぐ側にいたのに、どうしてこんなに遠くに感じるのか不思議に思う。

いや、本当は分かっている。

（本当は……思いあってはいないんだもの…）

扉を開けて出ていくシュクルを見ながら、ミアディの頬に一筋の涙が伝った。

第2話　天つ人の婚礼ーミアディ

シュクルが出て行ってしばらくすると、控えめに扉を叩く音がした。こんな格好でどうしようと思うものの、「開けてもいいかしら」と問いかける声を聞いて、反射的に「はい」と答える。

それを聞いて静かに扉を開けて入ってきたのは、シュクルの母、エマだった。

声で分かったものの、気づくと先ほどとはまた違ういたたまれない気持ちになる。

エマは戻ってきたミアディに対して好意的で優しかった。ミアディの母とも昔馴染みで、ミアディが小さいときもよく面倒を見てくれた。

けれど今は…今はどうなのだろうか、とミアディは思う。今は嫁と姑という立場になる。

自分の母親と重ねると、あまり好意的に思われない気がして、思わず身構えた。

「ミアちゃん、大丈夫？」

「…あ、あの……」

エマの態度は婚儀の前とまったく変わらない。

そのため逆にミアディはどう返していいのか分からなかった。

「初めてなんだから十分気遣うようにって何度も念押ししたんだけど……」

エマはそういいながら、湯を沸かしてあるから身を清めるよう促した。

ミアディは素直に頷いて、肩にかけられた服が落ちないように気

をつけながら、エマのあとをついていった。外を出ても誰もいないようでほっとしながら、すぐ近くの布で仕切られた場所へ入る。
体を清めるのはたいてい川などの水か、少し豊かな村なら共同浴場を作る。個人の家での湯浴みなどは、豪族やよほどの商家でもない限り、そのような設備はない。
この村にも共同浴場はあったが、そこにミアディが行くのを不安に思っていたため、エマが気を利かせてくれたのだった。
とはいえ、大量に沸かした湯を入れた桶をいくつかと、そしてミアディがいる場所を作ってくれている程度だったが。
それでもミアディにとってその心遣いは嬉しくて、エマにお礼を言った。

「あの、ありがとうございます」
「なに言っているの。せっかく息子のところに来てくれたかわいいお嫁さんなんだもの、大事にするのは当たり前。それにもう家族よ？」
「かぞく…」

微笑みながら桶に入った湯に布を浸すエマを、ミアディは不思議そうな顔で見つめた。
家族とはこうあるものだろうか、とミアディは少ない過去を遡る。
両親は、仲が良かった。でも、祖母は……脳裏に浮かんだ祖母の顔を思い出し、重苦しい気持ちになると同時に、温かい湯が頬に触れた。

「あ…」
「あら、熱かった？」
「あ、いえ。ちょっと他のことを考えていたので、驚いただけです」
「そう。それより掛けている服をとってもいい？」
「あ、はい」

ミアディは遠慮がちに答えると、エマは豪快に彼女の肩に掛けられた服を取り去る。
全裸になったミアディは恥ずかしくて顔が熱くなっていくのが分かった。
人前で裸になるのはもちろん、なにより先ほどの痕が残っている。思わずしゃがみこんで縮こまってしまいたい心境だ。

「ごめんなさいね」
「エマ…さん？」
「あら、私のことはお義母さんでいいわよ～」
「え…？」
「息子のお嫁さんになってもらったんですもの、当然でしょう？」

なってもらった、というところで、やはり半端者同士まとめられたのだろうか……と勘ぐってしまう。
だがエマはそんなことは気にしないで。

「話がそれちゃったわね。ミアちゃんがすごく恥ずかしいのは分かるの。でも、頭の固い連中を納得させなくちゃならなくてね…」
「……そう、ですね…」

語尾に続くにつれ、少しずつ怒気を含んでいったエマの声に、ミアディは引きつりながら答える。
この婚礼も、ミアディが純潔でなければ白紙に戻ってしまう。
天つ人の血はどれだけ薄れても、その特徴である金色の瞳は変わらない。
たとえば、ミアディが子どもを生んだとして、その子どもは必ず天つ人の特徴である、金色の瞳を持って生まれる。
裏を返せば、ミアディが前にいたところで、異性――しかも普通

の人間との間の子だとしても、金色の瞳を持つ子が生まれる。その相手が同じ天つ人ならいいが、普通の人ならば、天つ人の能力が薄れてしまう。

それを恐れた村の人たちの条件が、ミアディの身が清らかなままならば、ということだった。

シュクルとミアディも両親が型破りで普通の人と結婚したため、すでにそこで血が薄れている。村人は安全のために、これ以上、その血を、能力を薄れさせることはできなかった。

そこでふと、自分に優しくしてくれるのは、普通の人なのに天つ人であるシュクルの父――クトカと結婚した罪悪感からなのだろうか、という考えが浮かぶ。

自分の過去を振り返れば、シュクルも同じようなことを言われてきたのかもしれない、と。

「あの…」

「ん、なに？」

ミアディの体を柔らかい布で拭いているエマに声を掛ける。

「どうしてエマさんはクトカさんと結婚したんですか？　その……」

「天つ人と普通の人との結婚は祝福されない、のに？」

「……はい」

ミアディの母親は彼女が七歳の時に亡くなり、そのあと、父の生家に移った。

父の生家には祖母が一人いたが、祖母は天つ人と結婚した父と顔をあわせるとすぐ口論していた。

天つ人に手を出すなど、お前のせいで私は肩身の狭い思いをしているが分からないのか――と何度も祖母は父を罵った。ミアディに対しては、まるでそこに彼女が存在していないかのように振舞った。

それでもめげずに、子どもながら家事を一生懸命やった。祖母は年だったから家事は辛いだろうと思ったし、自分はここにいると主張したかったからかもしれない。

けれど、祖母は最後までミアディの存在を認めてくれなかった。祖母の生家でのことは悲しい思い出しかなく、ミアディの心に傷を残した。

「そうね、周りはものすごく反対したわ。でも、マリザ――ミアちゃんのお母さんも、サリムと結婚して――そのせいかしらね、周りに何を言われても気にしないようにしよう、って思ったの」

サリムとはミアディの父のこと。

けれど、どうして二人のおかげでそうなったのか分からず、ミアディは首を軽くかしげた。

「たぶん同士って言えるのかしら？　がいたから。マリザとサリムも頑張っているのに、私も負けちゃいられないわ、って思ったの」

エマの言いたいことが分からず、ミアディは少し首をかしげた。

そんなミアディにエマは続けて言う。

「それに誰を好きになるなんて、周りに決められることじゃないわ。それは天つ人も普通の人も同じでしょう？　私たちは私たちが互いに選んで伴侶になったの。マリザとサリムもそうよ」

懐かしげに語るエマに後ろ暗いところはない。

禁忌を犯したのに、その顔には自分のしたことに対する自信が見えた。

「納得できない？」

エマの言葉に頷こうとした瞬間、洗い流すための湯を上からかけられて、頷くというより、湯を避けるために下を向いた形になった。
少なくともエマは文句を言われることを覚悟して、天つ人であるクトカと一緒になったというのは分かった。
両親も同じように互いのことを思って一緒になったのだろう。小さい頃、この村にいたときは、家族三人で幸せだった。子どもの目から見ても、両親は互いに愛しあっていたのも分かる。

そうして自分の意思で自分の未来を選んだのに、なぜ今になって天つ人同士を結ばせようとするのか――それが分からない。
孤児になったミアディを引き取るには、婚姻という形は最良なのかもしれないが、他に方法がないわけではなかった。
シュクルにはまだ仕事で相方がいない。神剣を扱うシュクルに、封魔石を作るミアディなら、婚姻でなくても仕事の相方として引き取ることも可能だったはず。
どうしてシュクルの未来を縛るような方法をとったのか、ミアディには理解できなかった。

（シュクルさんは、どうしてこの婚姻に同意したのかしら…？）

ミアディが『シュクルさん』と呼ぶたびに一瞬だけ顔を歪める。その様子から、どうしてもこの婚姻を、自分の存在を望んでいるとは思えない。
エマは周りに決められることではないと言い切ったが、今の状況は周りに決められたことだったし、シュクルも周囲に押し切られて、仕方なくなのかもしれない。

（なんでこんなことばかり考えちゃうんだろう。いっそ寂しいなんて思う気持ちがなくなってしまえばいいのに……）

ミアディには自分の置かれた立場を把握するのが精一杯で、人の感情まで推し量ることはできなかった。

第3話　天つ人の婚礼ーシュクル

一方、シュクルのほうはその後着る服だけ渡されて放り出された。この扱いの差はなんなんだと思ったが、この場合は仕方ないかとため息をついた。こういった場合、人に見られたくないのは女性のほうだろう、と無理やり納得したせいだ。

シュクルの家からは共同浴場より川のほうが近い。すぐに川のほうを選んだ。それに頭と火照った体を冷やすのに、川の水のほうがちょうどいい。

着替えと体を拭くための大きめの布を持って川へ向かった。

適当な大きさの岩に着替えをおいて、そのまま川の水の中に飛び込むように入る。ひやりとした水の冷たさが心地よい。

水を手ですくって顔を数回洗っていると、後ろから声をかけられて振り返った。

「なんだよ？」

声をかけてきたのは、村でシュクルと同じくらいの年の少年たち――サハウ、スィク、タカの三人だった。シュクルと同じ十七歳で、タカだけ一つ年上の十八歳だった。

「決まってんだろ、どうだったんだよ？」

「そうそう、気になるよな！」

興味津々に聞いてくるのは覚悟していたが、事が終わってすぐに来るとは思わなかった。

水を指されたような気持ちがして、シュクルは眉を顰めた。

「そう嫌な顔するなよ。俺たちより先に結婚するんだから、聞かれ

たってしょうがないだろう？」
「だからってすぐ来んなよ」
「そりゃ気になってしょうがないんだから、無理無理」

悪びれずに答えるのはタカ。
この周辺で平均的な寿命は四十歳と少しだろうか。そして、結婚する年齢はたいてい男性、女性とも十八歳くらいからだ。それからすると、シュクルとミアディの結婚は少し早い。
理由は、天つ人は能力と仕事上、普通の人より早く亡くなる可能性が高いからだ。ミアディの母、マリザも二十五歳という平均年齢よりはるかに若い年で亡くなっていた。
とりあえず、天つ人の能力と寿命は置いておくとしても、同じ年の仲間より先に結婚に至ったため、やっかみと興味を含んだ好奇の視線に晒される羽目になった。

（まあ、だからミアのほうがこうならないように母さんがついたんだけど…）

この辺りは貞操観念が強い。特にこの村はそれが顕著だ。基本的に結婚するまで、床を共にすることは許されていない。付き合っていて、その仲がそれなりに進んでいるのが分かってしまえば、即結婚に結びついてしまう。
特に男性より女性に対してそれが強いため、他所にいたミアディの風当たりはきつい。せめて同じ村にいて、そのような噂がなければ、もう少し落ち着いた進み方をしただろうが。
とはいえ、ここでその愚痴をこぼしても仕方ない。それより三人の追求を逃れることのほうが問題だった。

「別に。普通だと思うが」

仏頂面で答えるが、本当のところ、これがシュクルの本音だ。
シュクルもミアディも互いに初めてなのだから、誰かと比べようもない。
それに既婚の村の男から聞く猥談に関しても、聞くのと実際にするのではまったく違う気がして、これまた比べられる感じではない。
というより、余裕などないのに、少しでもミアディを気遣わなくては、とそればかり気にして、自分がどう思ったかより、ミアディのことのほうが記憶に残っていた。
短く答えたのがシュクルの余裕だと思ったのか、三人はそれぞれ好き勝手な感想を口にしている。

「へー、さすが結婚すると違うな」
「いいよなあ、あの子かわいいし。羨ましいよなあ」
「だよなあ。あんなかわいい子なら早く結婚してやっかみを言われてもいいな。でも、タカはもうすぐだろ？　ラタ……だっけ」
「ああ、まあな。でも、結婚するまでまだだからな」

それは他人事だからだろうが、という突っ込みはこの際黙って聞き流す。
とはいえ、タカは一つ上だし、同じ村のラタという少女と結婚が控えているせいか、先に結婚したシュクルに対して、冷やかしにきたというより、純粋に気になるからららしかった。
が、冷やかしにきたのに代わりはない。
しかし、三人の話の一部には、心の中で同意する。
シュクルの目から見てもミアディはかわいい。目が大きくはっきりしていて、その瞳の色は自分と同じ金色。鼻はあまり高くないが、童顔なせいか、低さが気になるほどではない。そして小さめの口に少し厚めの唇は柔らかくて口付けたときに気持ちよかった。
まだ15歳という若さのため、大人の女性が醸し出す色気と豊満な肉体はないが、それでも柔らかい丸みを帯び始めた体に、日焼け

をしていないようで想像以上に白くてきれいな肌だった――と記憶してる。
そこまで思い出して、顔が熱くなっているのが分かった。
シュクルは慌てて「もういいだろ。早く戻らなくちゃいけないんだから」と吐き捨てるように言いながら、その顔を見られないように後ろを向いて水浴びを再開した。

「ちぇっ、もったいぶって」

三人の中で一番元気なサハウがぼやく。
その後、タカが再確認するかのように。

「そういや、例の問題は大丈夫だったわけ？」

その問いにシュクルの指先が一瞬だけ止まった。

「問題ない。あいつは初めてだった。だいたい、あいつは……いや、なんでもない」

ここまで言いかけて、ふと他人に話すことじゃないと思ったのか、途中で話すのをやめる。
サハウの「途中でやめるなよ～」という声が聞こえたが、無視して水を体にかけた。しかも退けと暗に示すかのように、思い切り水を掬ってかけたので、後ろにいた二人は慌てて飛びのいた。
その後、舌打ちする音が聞こえたが、ひたすら無視していると、タカの「早く戻って来いよ」と聞こえたあと、三人の気配が背後から消えた。
振り返っていなくなったのを確認してから、ふう、とため息をついた。追求が浅くてよかった、と心からほっとして。

「まったく……当分こうしてからかわれるのか」

村にいる若い者はあの三人だけではない。しかも今回は天つ人の結婚で、皆より年若く結婚している。

そんなシュクルとミアディが、話題の種にならないわけがない。

とはいえ、あのミアディがそれに耐えられるか――シュクルは不安になった。

（あれじゃあ、他の男どころか、まともに人付き合いなんかできないぞ……）

村に戻ってきたミアディを見ていたシュクルには分かる。

ミアディは異性だけでなく、人を怖がっている。そんな彼女が誰かと付き合えるわけがないだろう。

（なんであんなふうになってしまったんだろう？）

シュクルの知るミアディは、元気がいいとはいえなかったが、それでも笑顔を絶やさない子どもだった。

『しゅくるーしゅくるー』

子どもには少し大きすぎる籠を抱えながら、小走りに近づいてくる小さなミアディを思い出す。

その時は剣の練習のため、木刀を持って素振りをしていた。近づけば危ないと思ったため、『くるな』と短く言うと、ミアディの足がぴたっと止まる。

その後、どうしていいのか分からず、そこで体を小さく揺らしながら、笑顔が崩れていくのが見え、シュクルは慌てて素振りをする

のをやめてミアディに近づいた。

『ミア、ごめん。でも、あたるといたいから…』

決してミアディを邪険にしたつもりはなかったのだが……言い方が少しきつかったのだろうか、とシュクルはミアディを宥める。

泣きそうなのを堪えているミアディに近づき、『もううごいてもだいじょうぶだから』というと、舌足らずな声で『しゅくるっ！』と嬉しそうな顔に戻って飛びつく。そんなミアディを受け止めきれず、二人して地面に転がった。

『ばか、いきなりとびつくなよ』

『だって』

『おれはここにいるって。それよりメシもってきてくれたんだろ？』

『うん』

『おなかすいた』

『すぐだすね。でも、そのまえにエマおばちゃんがからだをふくようにって』

ミアディの性格を考慮してか、籠の中には一番上に柔らかめの布が入っていた。それを取り出してシュクルに差し出す。受け取って汗をふき取っていると、ミアディは籠の中から食べやすく料理されたものをいくつか取り出した。

声をかけると笑顔が返ってきて――そんなミアディを素直にかわいいと思っていた。

なのに今は――

『あの、シュクル…さん。エマさんがご飯だって呼んでます』

シュクルが何かをしていると、用があるのに声をかけるのも躊躇う。なにより、自分のことをさん付けで呼ぶ。他人行儀でよそよそしい。

他人行儀といえば、ミアディは戻ってきてから、シュクルの家に一緒に住むように両親が勧めた。

けれど他人なのに一緒に住めないと断り、昔住んでいた家を片付けて、数日前まで一人でそこに住んでいた。

こちらから出向かなければまったく顔を見せないほど、外に出たがらなかった。

まるで、何かに怯えているかのように。

「くそっ…」

何が彼女を変えてしまったのか、シュクルには分からない。

ただ分かるのは、結婚したものの彼女との間にある見えない壁は、完全に取り払われていないことだった。

第４話　天つ人の婚礼ーその後

ミアディはエマに新たな着物を着せられていた。
普段着より豪華なそれに袖を通すのにためらいを感じたが、普通の人の婚礼でもこれくらい着飾るのは当然だ、とエマに説得される。
普段は薄めの布でできた下着になるものを身に着け、その上にしっかりとした布地でできた服を羽織り、前で併せたあと、帯で留めている。
今回のものは布地の上等さもさることながら、２枚だけでは終わらず、色の違う薄手のものを数枚羽織ることになった。しかもところどころに刺繍などが施されていて、普段着よりはるかに上品で華美なものだった。
たぶん、もう一生着ることはないだろうな、とミアディは思いつつ、腕を持ち上げて袖に施された刺繍を見つめた。その間にもエマはミアディの腰に帯をくるくると何周か巻いて、端を中に入れて留めている。

「さて、あとは頭ね。こっちきて」
「あ、はい」

エマはミアディを少し離れた場所に用意していた丸い木の椅子に座らせる。
祭事や身分が上の者の前に出る場合、女性は髪を結うのがしきたりだった。
ミアディの髪はふわふわとした柔らかめでくるくるした巻き毛で、瞳より薄めの淡黄色。
そのミアディの髪をエマは細い櫛で丁寧に梳いていった。
「ミアちゃんの髪の毛って癖があってまとめやすいわね」

まだ水気を含んだその髪を綺麗にとかしてから、エマはくるくると巻くと、器用に頭の上のほうでまとめ上げていく。

「そ、そうですか？」

「ええ。直毛だとまとめるの、難しいのよ」

「エマさんの髪、とてもきれいですけど……やっぱり大変なんですか？」

エマの髪は黒い艶やかなまっすぐな髪だ。今日も婚儀のために、きれいにまとめ上げているのに、と思う。

きちんとした場所に出るのが初めてのミアディは、髪を結い上げるのもこれが初めてだ。普段は後ろで軽く結い紐でまとめているか、そのままにしているかのどちらか。

だからエマの大変さは分からない。

「大変よ。きれいにできたと思っても、すぐ崩れてきてしまうの」

「思ったより大変なんですね」

「そうなのよ」

会話をしながらも、エマは着物と同じ色の布で巻き結んで両端をたらす。それと小さいがかわいらしい少し青みがかった花を、ミアディの髪にいくつか絡ませる。

その後は軽く顔に白粉と紅をひいた。

「さ、出来上がり」

渡された手鏡で見た姿は、花嫁とは言いづらい幼さが見える。

まだ幼さが残るミアディに、大人っぽいものは似合わないが、その髪型はミアディによく似合っていた。

「ありがとうございます、エマさん」

ミアディのことを考えてしてくれたのがわかって、エマにお礼を言った。

エマは笑みを浮かべながら、あと少しだから頑張ってね、と告げる。

そうだ、この後、また皆の前に出なければいけないのだ――と思うと、ミアディの体が少しだけこわばった。

人前に出るのに慣れていないし、ミアディに対して余所者だと訝る視線を向けるものもいる。その視線の前に出るのが怖い。

でも、出なければ終わらないのだ。気づくと手に力が入っていた。少し深く息を吸って、心を落ち着かせようとする。

そんなミアディの心境が伝わったのか、エマがミアディの肩にそっと触れて、「後ちょっとだからがんばって」と告げる。

ミアディはなんとか「はい」と答えた。

エマはこの場所の片づけがあるため、祝宴には一人で行かなくてはならなかった。

正直、人前に出るという恐怖だけでなく、体が痛むため、早く横になりたい気持ちが強い。けれど、ここで席をはずしたら、もう一人の主役であるシュクルに恥をかかせてしまう。

シュクルがすでに席についていればいいのだが――と思いながら、ミアディはゆっくりと明るく声のする方向へ足を向けた。

少し歩くと、ミアディを待っていたかのように、二人の女性が腕を組んでミアディに鋭い視線を向けている。この村に住む、ウズリとロシというミアディより少し上の年頃の娘たち。

この二人はシュクルのことを好意的を寄せていて、ミアディのことを敵対視していた。今日までにも何度か嫌味を言われたことがあ

る。
その二人だと認識すると、ミアディは身を硬くした。
罵られる言葉には、どれだけ経っても慣れるものではないのだ。
「ずいぶん長いお楽しみだったようねぇ？」
「……」
「あら、何にも言えないの？　この口は何のためにあるのかしら？」
ウズリはそういうとミアディの唇に触れて、そのまま指先を横に力を入れて動かした。
「…っ」
唇をこすられた軽い痛みと、触れられるという恐怖にとっさに目を瞑った。
同時に瞑った目が潤み、熱を持つ。
「あらぁ、せっかくきれいにしてもらったのに、汚れちゃったわねえ」
「ならこれできれいにしてあげましょうよ」
ウズリがくすくす笑い、ロシはわざわざ持ってきたものを取り出す。
その手に持っているのはきれいな手巾などではなく、使い古されて汚れて色がくすんでいる家を掃除するための雑巾だった。
けれど、目を瞑ったままのミアディには分からず、その布が触れようとした瞬間。
「うわー、いじめの瞬間見ちゃったよ」

横から声がした。その後も、「女の嫉妬って怖えな」と嫌味を含んだ声でもう一人。
そのときになってやっとミアディは恐る恐る目を開けた。
左側のほうから、ミアディを助けてくれたのは、シュクルの友人のサハウ、スィク、タカの三人だった。

「大丈夫？　ミアディ」

一番最初にミアディに声をかけたのは、年長者のタカ。
彼はミアディにそっと近づくと、きれいな手巾をそっと差し出した。

「あ、ありがとう……タカさん」

ミアディの気持ちを察してなのか、必要以上に近づかず、手巾だけそっと手渡す。
それを受け取り、ミアディはウズリの触れたところを拭った。紅が取れてしまっているのなら、一度エマのところへ戻ったほうがいいかと、ミアディは迷ったが、ここにはまだウズリも、タカたちもいる。
一人でそっとこの場を離れることができず、どうしようかと迷った。

「ちょっと、なんでそんな子にやさしくするのよ！？」
「当たり前だろ。俺達はシュクルの友だち。そのシュクルのかわいい嫁さんをいじめる必要なんてないし」
「そんなの天つ人だからってだけじゃない！　そんなよそ者…っ」
サハウの揶揄するような返事に、ウズリが気に入らなかったのか、余計に声を荒げる。

「よそ者じゃないよ。小さいときにいたんだから」
「そうだよな。家の事情でしばらくの間離れてただけだし」
サハウとスィクがからかうようにいい、タカはため息をつく。そして。
「あのさ、なんでも自分の思うとおりになると思わないほうがいいよ。そりゃ、君はきれいだから、見た目で騙されるのは多いけどね」
「なっ…」
「顔はいいかもしれないけど、性格を考えると俺はごめんだな」
「俺もー」

たしかにウズリはこの村で一番の器量よしと言われている。ウズリのことは隣の村の人も知るほどに。そしてそれを知っているウズリは、それを鼻にかけているところがあった。
とはいえ、ここでこんな言い争いをしないでほしい、とミアディはウズリの怒気を孕んだ表情を見ながら身をすくめた。

「君がどれだけシュクルを好きでも、シュクルと一緒になることはできないよ」
「それくらい……私だって知ってるわよ！　でも、ただ同じ天つ人だからって理由だけで、この子は……そう思うと腹が立つのよ！」
ウズリは叫びながらミアディを指差した。その行動にミアディの体がぴくりと震える。
けれど、タカは冷静で。
「君が天つ人だとしても、また、シュクルが天つ人じゃなくても……それでも、けして、君を選ばないよ」

冷静すぎる口調に、タカの言葉に嘘が含まれていないのを感じる。
ウズリもそれを察したのか、次の言葉が出ず、顔を真っ赤に染めて睨みつけるだけだった。
この膠着状態はいつまで続くのか、と思われたとき、渦中の人物が現れた。

「こんなところで騒いでんなよ」

話題の中心人物である、シュクルだった。

「お前がのろのろしているせいだろ？」
「俺のせいかよ？」

騒いでいたというのなら、話の内容を聞かれたのかもしれない――と思い、ミアディは余計に身の置き場がなかった。
天つ人だからこその婚礼。そうでなければ成り立たなかった。
それを再確認されているようで、いたたまれなくなる。

（もう、いや…）

タカが貸してくれた手巾を握り締めて小さくなっていると、急に肩を掴まれてぐいっと引っ張られた。

「泣くと化粧が落ちるぞ」
「シュクル…さ……」
「行くぞ」

ミアディの肩に手をかけたまま、シュクルは促すように祝宴の場に向かう。

肩に感じる温もりに、ミアディは少し安堵した。

「こんなことくらいで怯えるな」

「……」

「別にやましいことをしているわけじゃない。なにも恥じることなんかない」

「……はい…」

力強いシュクルの声。でも、ミアディにはその言葉を信じることができなかった。

その身を恥じているわけではない。

けれど、その存在を疎まれ続けた彼女には、自分に対して自信がもてなかった。

第5話　交わった視線

夜が明けるころ、やっと祝宴も終わった。あれほど騒がしかったのに、今はわずかに虫の声しか聞こえないし、その場に明かりひとつもなかった。

ただ、宴の片づけが終わってないことから、あの喧騒が夢でなかったと分かる。

ミアディは最後のほうはほとんど覚えていなかった。

ただ、村の人たちより一段高いところに座り、ひたすら笑みを浮かべるのに苦労したのだけはかすかに覚えている。

宴席に戻ってしまえば、ウズリやロシのように直接敵意をむき出しにされることはなかった。

ちくちくと刺さるような視線を感じてはいたが……それらは気にしないようにして、終わったときはほっとして、後はシュクルに支えられるようにして宴席から離れた。

シュクルはふらつくミアディを利き腕で支えながら、もう片方の手で松明を持ち周囲を照らす。

ミアディの家は村の中では隅にあり、そこにたどり着くまで明かりがないのと、家にたどり着いた後、火を起こすのに手間だからだ。

二人は以前ミアディが住んでいた家に住むことにした。

エマは一緒に住めばいいじゃない、と言ったが、二人は遠慮した。

ミアディは仕事で作る封魔石の元になる石は特殊――宝石という類ではないが――で、それが採れる場所は彼女の生家のほうが近い。

それになにからなにまで世話になるようで、申し訳ないと思ってしまうのと、人の目が気になるからだった。そんなミアディの性格を考慮してか、シュクルもあっさりと承諾した。

家まで歩く間、二人は無言だった。

その雰囲気に耐え切れず、ミアディは口を開くが、シュクルに「無理するな」と一言で終わらされてしまう。
それが自分自身を拒否されているようで、ミアディは押し黙った。そしてそのまま、シュクルにしがみつくようにして歩く。
しがみついて触れているところから、相手のぬくもりを感じるのに、なぜか心には冷たい風が吹いている気がした。それを埋めるかのように、しがみついた手に力がこもった。
妙な緊張感を漂わせながら、なんとか家にたどり着く。
すると、家の中には明かりがわずかながらに灯っており、二人は少しだけ訝しげな顔をした。

「どうして…？」
「おおかた、母さんが用意してくれてたんだろ。あの後、宴にもいなかったしな」

シュクルのほうは気づいていたのか、まだ驚いた表情が抜けないミアディに、軽いため息をつきながら答えた。
それに対して、そういえば……と記憶を辿ると、宴に戻った後にエマの姿がなかったのを思い出した。

「エマさんには、なにからなにまでお世話になってしまって。明日、ちゃんとお礼を言わないと…」

独り言のように呟くと、シュクルはそれに対して。

「気にする必要はないだろう。母さんは娘ができるって喜んでたし」
「そう…ですか？」

少し信じられない気がして、シュクルを見上げるようにして言うと、シュクルの顔が少しだけ険しいものになる。

怒らせてしまったかな、と身をすくめると、頭の上でため息が聞こえた。

「シュクルさん？」

「あのな、言っておくけど、今日を一番楽しみにしていたのは母さんだ。母さんは、別に天つ人だからとか、普通の人だからとか、そういったことに関して気にしないからな」

それくらいの気持ちがなければ、天つ人であるシュクルの父と結婚するなどしないだろう。

祝福されず、陰口を叩かれるのを覚悟しなければできないことだ。

でも、なぜ今それを…？

「それは…わたしも聞きましたけど……」

「そんな母さんが、世間体を考えて同じ天つ人だという理由だけで、ミアを歓迎するわけないだろ？　ミアを気に入っているから、素直にミアのことをかわいがっているだけだ。なのに、そんなに他人行儀にされると、逆に悲しむ」

「……はい」

確かにエマはここに戻ってきてから、なにかと面倒を見てくれた。シュクルとの縁談がしっかり決まる前から。

もともとエマはほかの人にも親切だったから、だからミアディにも声をかけてくれるのだろう、と思っていた。というよりも、そう思わなければ、もし違ったときに、より辛い気持ちを味わうだろうと想像してしてしまうからか――なんにしろ、エマのことをちゃんと見てなかったのだと、改めて感じた。

「すみませんでした。わたし…」

「分かったら、もう少し回りを見たほうがいい」

「は、い…」

もう一度うなずくと、またシュクルがため息をつく。何か気に障ったのだろうか、と心配になって見上げた。

そのときになって、初めてシュクルと目が合う。

「やっと、見たな」

「……」

「俺は今どういう気持ちでいると思う？」

「……それは……ただ…怒っているのは…分かります」

自分と同じ金色の瞳に、怒りの色が見える。それが強くて、ミアディは視線をそらすことができなかった。

同時に、こんなに長く人の顔を見ていたのは、久しぶりだと思った。

いつもは人の視線が怖くて、自分のほうからそらしてしまう。けれど、今はそらすことなく受け止めていた。

自分に対する怒りの感情なのに。

「鈍感、というわけじゃないんだよな」

「え？」

「いや、俯くのはやめたほうがいい。それだと相手が何を考えているのか分からない。分からなければ、どう動いていいのか分からなくなる」

「はい…」

シュクルの言葉に何ひとつ反論できず、ミアディは小さく頷いた。

ここに戻ってきてから、誰とも向かい合っていなかったのを思い出した。

あれほどやさしくしてくれたエマに対しても、彼女の本質を見よ

うとしなかった。ウズリとロシに対しても、ただ怯えるだけできちんと向き合っていなかった。
視線をそらし、相手を見もしない姿は、きっと彼女たちの憎悪を煽ったことだろう。自分の存在を無視されるのは、誰だって嫌だ。
村の人たちのミアディに向ける猜疑心も、自分自身の行動の結果なのかもしれない、ということに気づいた。
ミアディの行動だけではないだろうが、一役買っていたのは確かだろう。

「わたし…黙っておとなしくしていればいいと思ってました。そうすれば、わたしの言葉を不快に思う人も少なくなると思って……」

少し震える声で自分の思いを吐露する。
ついで、それを聞いたシュクルの顔を見て、言葉を続けようとした瞬間。

「それより開けるぞ。ここで話をしていても仕方ない」
「……あ、すみません…」

少しがたつく引き戸を開けると、暖かい風を感じる。
部屋の中央にある囲炉裏に火を入れてくれていたのだろう。すでにおきびに近くなったものが、かすかに赤い光を放っていた。

「あったかい…」
「どうやら部屋のほうも用意していてくれたらしいな」

すでに寒さを感じさせる季節に、この心遣いはありがたい。
本当なら、用意してあった薪に、シュクルが持ってきた松明で火をつけてから暖をとる予定だった。
とはいえ、松明から火をとっても、中を暖かくするまでにはかな

りかかる。

「明日…エマさんにお礼を言わないと…」

思わずこぼれた言葉に、ミアディは慌ててシュクルを見る。

そして珍しく矢継ぎ早に。

「あ、お礼ってさっきの意味じゃないです。そのっ、ここまでしてくれる気持ちに対してのお礼であって……本当に帰ってきて暖かいっていうのはうれしくて、その……」

何も答えないシュクルに、ミアディはだんだん不安になって語尾が弱くなっていく。

だんだん何を言っていいか分からなくなって、言葉が詰まった。

また怒らせてしまった、とミアディは後悔したが、シュクルの表情は逆に柔らかくなっていた。

「あの…」

「いや、意味は分かってる。そういう意味でなら、母さんも喜ぶ。たぶん、朝飯も用意してるだろうから、なるべく早めに行こう」

「は、はいっ」

「ついでに言うなら、『エマさん』なんて他人行儀じゃなくて、『義母さん』と呼んでやってくれ。そのほうがさらに喜ぶ」

「……お義母さん……いいんですか？」

「当たり前だろう」

「はい……、これからはそう呼ばせてもらいます」

「ああ」

良かった、怒ってない、と思っていると、いきなり引っ張られる。

思わず「きゃっ…」と小さく声が漏れるが、触れたぬくもりに驚

いて、それ以上声にならなかった。

「もう遅い。部屋も暖かいし、このまま寝よう」

そういってシュクルはミアディを抱き寄せ、板張りの部屋のところどころ敷かれた厚手の敷物の上に座り込んだ。

ミアディが暴れないでいると、シュクルはそのままミアディを囲炉裏のほうにして横になった。それから近くにあった毛布をばさりと二人の上にかける。

その後、まるで大事なものを包み込むかのように抱え込まれるた。

婚儀でのようなことは何ひとつなく、体中に感じるぬくもりを心地よく思いながら、ミアディは深い眠りに落ちていった。

第6話　歩み寄り

婚儀から数日たち、二人での生活もなんとか慣れてきた。
シュクルは仕事で呼ばれれば一、二日いないこともあったし、エマがなにかと顔を出してくれていたので、あまり二人で生活しているのだという実感はないが。
しかも、あれから二人は床を共にすることがない。それがミアディにとって、やはりこの結婚は天つ人としての義務だったのだ、と疑ってしまう。

（だめ。そんなこと考えちゃ……。エ……お義母さんだってとても親切だし、シュクルさんだってはっきりものを言う人だもの。嫌だったら嫌って言うはず……だから……）

その都度、ミアディは何度も自分にそう言い聞かせた。
それよりも信じようと努力し、婚儀の晩にシュクルに言われたことを守ろうとした。
うつむいていた顔を上げた。そのため、シュクルの顔をよく見るようになった。その表情は思ったものより優しく、ミアディを見つめているのに気づいた。
その視線に最初は驚いた。それから、少しずつなぜか落ち着かない気持ちになっていた。
優しくされているのに落ち着かなくなるこの気持ちがいったいなんなのか、ミアディにはまだ理解できなかった。

＊＊＊

その日、シュクルは朝から仕事だといって出かけていった。
ミアディはいつものようにシュクルの実家で朝食をもらって見送ったあと、自分の家に戻った。そして、すぐに水が少なくなっているのに気づき、桶を持って川へと向かった。
水汲みは結構な力仕事だ。しかも一度運んだだけでは水瓶がいっぱいにならない。ミアディは数回川と家を往復したあと、むかし仲がよかったティニという同い年の少女に声をかけられた。

「おはよ、ミア！」
「おはよう。ティニも水汲み？」

互いにあいさつを交わしながら、ミアディの横に並んで歩いた。ティニの手にも桶がある。同じように川に行くようだった。子どもでも家事などの手伝いをする。家族の一員だから。

「お手伝い？」
「うん、そう。ミアは……奥さんだものね。当然かぁ」
「当然？」

ティニの言った意味が分からず、ティニのほうをむいて首をかしげた。

「え？　だって奥さんっていったら、その家を任されてるってことでしょ？　ミアだって…あ……ごめん」

途中で気づいたのか、ティニは急に謝る。
ティニはミアディが村に帰ってきてから一人で暮らしていることを忘れていた。水汲みも料理も掃除も――なにもかも、ミアディは一人でしてきた。結婚したから仕事が増えたわけではなかったのだ。
ミアディにすれば日常のことだし、謝られても……と思ったので、

「別に気にしてないから」とだけ答えた。大げさに否定しても、返事をしなくてもティニが傷つく気がしたから。

「それより早く行こ？」

「う、うん」

こういうとき、シュクルの言葉があたっていることに気づく。下を向いてティニの顔を見なかったら、きっとそのまま暗い空気のままでいただろう。

でも、ティニの目を見て、ティニの気持ちを考えれば、ミアディでも分かることがあるのだ。

（ありがとう、シュクルさん）

心の中でシュクルにお礼を言いながら、ティニと世間話をしながら川へと向かった。

水汲みは川の上流のほうでする、洗濯などは下流でするというのはどこでも同じだろう。誰だってきれいな水を飲みたいから。

水汲み場につくと、同じように水を汲みにきていたロシとばったり会ってしまう。

ロシとは婚儀の日以来、あってもいないし口も聞いていない。ジロリと睨まれると、ミアディは表情がこわばった。

けれどそれでは駄目だと、ミアディは思い直し、笑顔とまでは行かないが、ロシに向かって「おはよう」と声をかけた。

その様子にロシは一瞬驚き、その後、小さな声で「おはよう」と返してくれた。

（もしかして……こんな風にちゃんと話しかければよかった？）

好意的とまではいかないものの、それでも挨拶し返してくれるのは、ののしられるよりよほどいい。
もう少し何か話したかったが、ロシのほうは水汲みが終わったのか、「お先に」といった短い言葉だけで立ち去ってしまった。

「もう少し、話してみたかったかな……」

ぼそりと呟くと、ティニが驚いた顔をする。

「ティニ？　どうしたの」
「どうしたの、はこっちよ！　あれほど嫌がっていたのに、どうしちゃったの？」
「え、嫌……？」

ロシ本人に対して嫌がっていたわけではないが、周りから見ればそうではない。
ティニの説明では、ミアディは村の人が嫌い。特に直接文句を言ってくるウズリとロシに対しては、視界に入ると逃げるくらいだ、と言われた。
そんな風に見られているとは思わず、ミアディは絶句した。

「だからどうしちゃったのかと思ったのよ。私だってこうして普通に話してくれるまで時間かかったじゃない？」
「あ、そういえば……ごめんなさい」
「謝られても困るんだけど……まあ、だからどうしちゃったのかな、と思って」

ティニは軽く肩をすくめながら、ミアディの負担にならないよう、軽い口調で話した。

が、村を出る前は仲のよかったティニにまでそんな風に思わせていたのかと、ミアディは自己嫌悪に陥る。
思わず桶を抱きしめながら、ポツリポツリと話す。
「ごめんなさい、ティニ。そんな風に思わせてるなんて思わなかったから……」
「別にいいけど。今はこうして話もできるし」
「ううん、悪いことをしたら謝らなきゃ。本当に、ごめんなさい。知らない間に、ティニのこと傷つけてた」
顔を上げて、ティニの顔を見て、ミアディは最後のほうははっきりとした声でティニに謝った。
「ミア？」
「わたし、ここに戻ってくるまでちょっとあって……だから人の目が怖かった。だから、友だちだったのに、ティニの顔をもしっかり見れなくて……ちゃんと目を見て話をしないのが、どれだけ失礼なのかと考えなかったの……ごめんなさい」
どれだけ言葉を重ねても言い訳にしかならない。けれど、言葉にしなければ伝わらないこともある。
急に周りが自分のことをどう見ていたのかを知って、焦っていたのかもしれない。
ティニが「もういいよ」というのに、ミアディは「でもっ」と続けようとする。
すると、ティニはミアディの頬を軽くはたいた。
「…ティニ？」
軽くはたかれただけなので痛みはない。けれど、ティニのしたこ

とで我に返った。
はたかれた頬を触りながら、きょとんとした顔をする。

「目、覚めた？」
「……かも」
「よし。じゃあ、これの話はこれで終わり。ミアの態度に私は怒った。だから叩いた。でもってミアは謝った」
「そ、そう……なる？」
「そう。そして仲直りして終わり。友だちにはよくあることじゃない」

ね、と片目を瞑って合図する。
そのティニの顔を見て、ミアディの顔も緩んだ。「ありがとう」といって、満面の笑みを浮かべる。半分泣き笑いに近いもので。
でも、ここに戻ってきて、本当の意味で笑った気がした。

「よかった。ミアが昔のままのところがあって」
「そ、そうかな？」
「うん、嬉しい。それよりロシに対してはいきなりどうしたの？」
「えと、いきなりってわけじゃないんだけど……」

と前置きをして、ミアディはシュクルに言われたことを話した。
それを聞いて、ちゃんと人と向かい合おうと思ったことと。
だからロシにも挨拶をしたこと。話ができるのなら、話をしたかったこと、など。
話すのに夢中になって、ティニがミアディの顔を見て嬉しそうになっているのに気づかないほど、ミアディにとって、この村に戻ってきてから一番楽しいときになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6881x/

あまつひと

2011年10月27日23時01分発行